

影の下の家 —夏目漱石『門』と意識の流れ—

マイケル・ボーダッシュ

The House Under a Shadow: Natsume Sōseki's *Mon* (*The Gate*) and the Stream of Consciousness

Michael BOURDAGHS

Abstract

This article explores Natsume Sōseki's novel *Mon* (*The Gate*, 1910) in relationship to the author's *Bungakuron* (*Theory of Literature*, 1907), as well as in relation to the new modern discourses and institutions of property ownership that appeared during Sōseki's lifetime.

In *Bungakuron*, Sōseki worked to construct a universal, scientific theory of literature, relying mainly on the disciplines of psychology and sociology. The article traces through Sōseki's research into psychology, particularly the "New Psychology" that arose around the turn of the twentieth century as psychology attempted to establish itself as an independent scientific discipline by rejecting such 'non-scientific' methodologies as introspection. The article traces the model of consciousness that Sōseki used in his theory of literature and connects it to the mode of interior narration found in *Mon*.

Looking in particular at the "possessive individualism" found in William James's version of psychology, the article explores the ambiguous use of the word *kage* (shadow or image) in depictions of characters' consciousness in *Mon*. The emergence of "shadows" in a character's stream of consciousness tends to indicate a disruption of mental health, which in turn implies a loss of ownership of the self. The article argues that this is connected to the work's overall narrative, in which the protagonist Sōsuke remains to the end incapable of assuming the position of property owner in the world of the novel.

はじめに

本論文には二つの目的がある。一つは夏目漱石の『文学論』（明治39年）を手がかりにして、彼の小説を読むための新しい視点を開きたいということである。特に『文学論』で漱石が科学的な立場から文学を分析しているところに注目する。「文学」という不思議なものを理解するために、漱石は科学、特に心理学と社会学を利用して、科学との対比によって文学の特徴を定義しようとした。この漱石の科学に対する視点を彼自身の小説に当てはめると、何が見えてくるであろうか。本論では特に漱石の心理学観について追及する。

もう一つの目的は、漱石の小説に出てくる所有制

度、英語で言えば private property system の意義について考察することである。漱石は近代への転換期を生きており、その転換の一つの特徴は新しい近代的な所有制度が導入されたことであつた。ちょうど漱石が文学に目覚めたころ、例えば明治31年の明治民法や32年の著作権法が象徴するように、日本に近代的な所有制度の法律とそれに伴う思想や生活様式が台頭した。そして、石原千秋が指摘するように、漱石の長編小説の物語のほとんどがこの新しい所有制度にかかわっている⁽¹⁾。

これらの問題を具体的に追及するため、長編小説『門』を取り上げる。前田愛をはじめとする多くの学者はこの小説を取り扱うとき、小説の舞台となる「崖の下の家」を論点にするが、私の関心は崖にあ

るのではなく、この小説に出てくる「影」にある⁽²⁾。科学の知識、特に心理学の知見からは「影」はどんなような存在になるだろうか。そして文学には「影」はどんな意義を持つだろうか。

『門』における「影」

『門』は明治43年の3月から6月まで大阪と東京の朝日新聞に連載された。これは朝鮮合併（43年8月29日）の数か月前のことで、朝鮮独立運動の活動家による明治42年の伊藤博文暗殺事件が実際に小説の中で話題になる。『門』の世界はさまざまな影に取りつかれている。アジア大陸と帝国主義の影があり、近代的な資本主義の経済の影もある。そして主人公の宗助とその妻御米の個人的な過去、昔その友人を裏切ったという過去も夫婦の現在に暗い影を及ぼしている。

このように『門』は実に影が多い作品である。例えば冒頭の近くに、宗助と御米の崖の下の借家が描かれている⁽³⁾。

「南が玄関で塞がれているので、突き当りの障子が、日向から急に這入って来た眸には、うそ寒く映った。其所を開けると、廂に逼る様な勾配の崖が、縁鼻から聳えているので、朝の内は当って然るべき筈の日も容易に影を落さない。」
(一の二)

ところで、この文章に出てくる「影」という言葉は読者の頭の中にどんなイメージを呼び起こすだろうか。この「影」は光を指すのか、それとも崖が作る闇を指すのか。

小説の物語が展開するにつれ、読者はさらに頻繁に「影」に出会う。例えば、宗助と御米の過去が彼らの現在を曇らす影になっていることが何度も示唆されている。例えば、以下のような文章がある。

「宗助と御米の一生を暗く彩どった関係は、二人の影を薄くして、幽霊の様な思を何所かに抱かしめた。彼等は自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合って年を過した。」（一七の一）

この文章の「影」も曖昧だ。彼らの過去はある意味で暗い影になっていて、そしてその過去が「二人の影を薄くして」いる。この「二人の影」は読者の頭の中にどんなイメージを呼ぶだろう。光が遮られたところの暗さ、つまり英語でいう shadow のことだろうか。あるいは、「撮影」の影、英語で言う image ということか。（「結核性の恐ろしいもの」も肺の影であるが。）

そしてこの「影」を文学の問題としてだけではなく、心理学の問題として考えるとき、何が見えてくるだろう。ここで結論を先に述べておくと、漱石が理解していた心理学の下では、健康的な意識とは流動的で絶え間なく流れ続くもので、いわゆる「意識のながれ」である。そして、とくに『門』では「影」とは病的なもので、その意識の流れを邪魔し、滞らせるものである。「影」が現れると、混乱や不安が出現し、意識がうまく過去から現在まで、そして現在から将来へ流れなくなってしまう。「影」は結局病の原因になる。

例えば、宗助と御米が直面している危機を描く次のような文章がある。

「二人の間には諦めとか、忍耐とか云うものが断えず動いていたが、未来とか希望と云うものの影はほとんど射さない様に見えた。彼等は余り多く過去を語らなかった。時としては申し合わせた様に、それを回避する風さえあった。」
(四の五)

面白いことに、『門』の英訳者のひとりフランシス・マシーはこの文章の「希望と云うものの影」を英語で「ray of hope」にした⁽⁴⁾。つまり、「影」はここで光の欠如ではなくて、光そのものを意味するように翻訳されている。

硯友社の『新和英大辞典』で「影」の項目をみると、五つの英語の言葉が出てくる—— a shadow, light, a reflection, an image, a trace。他の和英辞典を見ると、さらにいくつかの英語の単語に出会う—— silhouette, phantom, figure, sign。実は、『門』では、「影」という言葉はこれらの複数の意味を全部内蔵している。そして漱石の心理学論を理解するために、これらの「影」はとても良い手がかりになる。

漱石と新心理学

まず漱石自身の心理学との関係について簡単に触れておきたい⁽⁵⁾。漱石は明治43年から45年までロンドンに留学していた間、『文学論』を書くための研究を始めた。『文学論』の目的は「文学」というものを科学的に定義することであり、漱石はどの時代でも、どの国にでも通じるような普遍的で科学的な文学理論を構築しようとしていた。

漱石によると、文学を理解したければ、文学以外の視点が必要である。『文学論』の「序」の言葉を借りるなら、「文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗うが如き手段」である。文学を理解するため、漱石は文学以外の視点として科学、特に心理学と社会学を選んだ。

漱石が心理学という学問に初めて出会ったのは、明治20年代で、彼が東京帝国大学で元良勇次郎の講義を聞いた時であった。当時漱石はアレクサンダー・ペインをはじめとする19世紀の代表的な心理学者について学んだ⁽⁶⁾。

しかし20世紀の冒頭に漱石がその『文学論』の準備のために本格的に心理学研究を始めた時には新しい世代の心理学が出ていた。この新しい世代の心理学者は19世紀の心理学者の立場とは一線を画しようとしており、ロンドンで漱石が読んだのは、主にこのいわゆる「新心理学」であった⁽⁷⁾。

『文学論』での漱石の基本的な立場は、科学と区別をつけることによって、文学の本質を定義しようというものである。つまり、漱石にとって文学とは科学でないものを意味する。面白いことに、漱石が読んでいた新心理学は、自らの存在を固い意味での科学として定着させるために、心理学と「文学」をきっぱり区別しようとしていた。学問としての心理学の起源は哲学にあり広い意味での文学にあった。しかし心理学が近代的な科学に仲間入りするためには、文学との縁を切る必要があった。「科学的」な知識と見做されるために、心理学は方法論的に厳しくなり、実験室で精密に測定する現象だけを研究の対象として認め、そしてその結果は数字や統計的なデータとして証明しなければならなかった。このように、近代的な科学として自分の位置を固めるために、特に文学という非科学的な領域から自らを区別することが急務だった。

例えば、この時代の科学的心理学の開拓者の一人

である英国人フランシス・ガルトンの業績を、その弟子シрил・パートが評価している次のような文章がある。

「氏が個人心理学の分野に着手した時、それはただ詩人や小説家、伝記作者、藪医者、詐欺師などにとっての夢想的な課題でしかなかった。しかし、氏が次の世代に席を譲る時までには、それは真つ当な自然科学の専攻の一つに変身していた。」⁽⁸⁾

この文が示唆するように、心理学の起源は文学の領域、とくに哲学にある、初期の心理学者は大学の哲学科に席をおいていた。つまり自分の心のなかで考えていることについて考え出した人々が心理学の祖であり、そして自分の内面を観察すること、内観や内省という方法が心理学の学問としての第一歩であった。しかし20世紀の冒頭に、この内観という方法を否定する傾向が現れた。なぜかと言うと、一人の意識を内観することは実験で確認することが難しい上、精密に測定することもできないからである。つまり、内観は方法としてあまりにも文学的なものなので、非科学的であるということだ。

この新心理学の三つの特徴をここでまとめておきたい。

一つ目の特徴は、19世紀の心理学は内観（introspection）を重要な方法として利用していたが、20世紀の新心理学は主にそれを否定して、実験室で精密に測定できるような、数字で表すデータだけを科学的と認めるようになったことである。例えば、漱石はドイツ人の心理学者ヴィルヘルム・ヴントの『生理学的心理学の原理』の英訳を読んでいるが、その中でヴントは「この件に関して、心理学をただ自己内省や哲学的な前提によって取り扱うことに対して異を立てる」と断言している⁽⁹⁾。心理学史においてヴント自身は過渡的な存在であり、実は実験室の中である程度は内観を方法として認めたが、当時の新心理学の研究書を見ると、内観を科学的方法として強く否定する例によく出会う⁽¹⁰⁾。

二つ目の特徴は、以前の心理学が持っていた二元論的な立場を否定したことである。つまり、19世紀の心理学において、人間の心理学的な経験は二つの次元に分かれ、内面と外界、あるいは心と身体を区別していた。しかし、新心理学によると、この二

元論は否定されるべきもので、人間の経験は実は一元的なものであるとされた。またここでヴントの『生理学的心理学の原理』がよい例になる。

「覚えておかなければならないのは、有機体としての生命は本当は一つであり、それは複数だがあくまでも一元である。よって、身体の生命過程を意識の過程から分けることもできないし、感覚に媒介される外の経験と、いわゆる『内面』の経験である自分の意識とを完全に別なものとして区別することはできない。」⁽¹¹⁾

ヴントは意識の内面と外面を、つまり内なる世界と外なる世界は区別できないと主張し、内面の意識と外の世界で認知される対象は一つの流れとして繋がれていると論じた。内面と外界、心と身体は単一で、一つの統一された体系をなすと論じた。

漱石が読んだウィリアム・ジェイムズもほぼ同じように、人間の心理学的な経験は一元的なものだと主張した⁽¹²⁾。以前の心理学はデカルト的な主体性論と二元的な内面論を唱えていたが、新心理学ではそれが否定された。

新心理学の内観否定とその一元論に反論した学者もいた。例えばイギリス人の心理学者ジョージ・スタウトの『分析的心理学』がある。スタウトは一方で脳や神経を実験室で研究する仕事の意義を認めながら、他方では心理学にとっては自己内省のほうが重要であり、内面と外面や心と脳の二元的な区別の必要性を主張した。東北大学附属図書館の漱石文庫に保存されているこの本に、こういった文章に対して漱石が懐疑的な書き込みを残している。「This is your aim, not all the psychologists」(これは君一人の狙いで、心理学者全員の狙いではない)。他にもスタウトに反論するような書き込みが見られる。例えば、「Too bold!」(言い過ぎ!)や「I am very sorry Mr. Stout」(スタウト君、悪いけど頂けない)などがある。二元論的に自己意識を内観する哲学的心理学より、漱石は実験室で脳の構造を一元論的に追求する新心理学を選んだのであろう。

新心理学の三番目の特徴は、意識の定義であった。新心理学によると、意識とはモノではなく、運動である。ウィリアム・ジェイムズの言葉を借りれば、意識は流れである。我々の精神活動は固定したモノではなく、持続的に展開する過程で、一つの連

続する不断の流れとして外の世界から刺激が我々の知覚神経を通して我々の脳に到達し、脳や神経がその刺激に対して反応を起こして、その反応が運動神経を通して逆に我々の身体を流れ、その流れは最後に外の世界へ及ぶ。健康的な意識は絶え間なく流れ続く。その流れが邪魔された場合や流れが詰まった場合は病気になる。この立場を取ると、精神の病とはうまく流れない意識ということである。

このように意識を一つの流れとして見なすことは、新心理学の一元論と裏表の関係にある。この流動的な流れのおかげで内面の世界と外の世界、そして心と身体は一つの回路に統一されている。逆に意識の流れが急に動かなくなれば、内面が外の世界から引き離されることになってしまう。新心理学の立場から見ると、そういう状態は病的であるのだ。

『文学論』と意識の流れ

漱石の『文学論』はこの一元論的な思想と意識が外の世界と内面の世界を一つの流れとして見なす新心理学をもって、文学の本質を定義しようとした⁽¹³⁾。そして彼の有名な $(F + f)$ という式が生まれる。

「凡そ文学的内容の形式は $(F + f)$ なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は観念の二方面即ち認識的要素(F)と情緒的要素(f)との結合を示したるものと云い得べし。」(第一編・第一章)

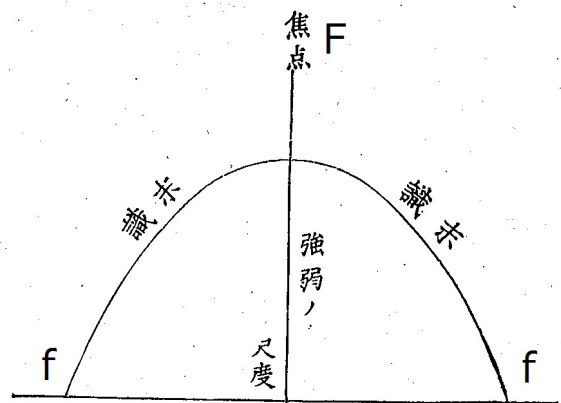


図1・意識の波(漱石の図にFとfを書き加えたもの)

漱石は上の図をもってこれを説明する。意識の流

れは波の形になり、頂点は意識の焦点Fであり、このFの前後を漱石は「識末」と呼び、これはfのことである。Fは意識の一番はっきりした部分になり、fはその焦点に付着する感情を表す。あるいは、Fはデノーションや意味を表すのに対して、fはコノーション、暗示的な意味合いを表す⁽¹⁴⁾。

ここで指摘しなければならないのは、この図は意識の一瞬だけを表しているということである。本当の意識を表すためには、これが複数の波の重なりでなければならぬ。つまり、意識は一瞬のものではなく、一つの流れとして理解しなければならない。小森陽一の言葉を借りるなら、『文学論』が描く意識は「運動化・プロセス化」されたものである⁽¹⁵⁾。時間的に見れば、Fは意識の今、現時点を表すのに対して、fは意識の消えつつある過去と出現しつつある未来に当たる。ある瞬間のFは次の瞬間に右側のfの位置に下がり、そしてその代わりに前の瞬間の左側のfが頂点に上がり、新しいFになる。

漱石によると、私たちの意識の内容がFだけを含む場合、それは科学的内容に属する。文学的内容になるために、Fとともにfも、つまり感情も必要である。言い換えれば、漱石が文学の本質を科学的に定義しようとするとき、文学の本質を確保するのはfである。文学を科学から区別させる可能性もこのfによるものである。人間の認知過程にはFもfも存在し、認知的な要素と感情的な要素が両方存在するが、文学だけがその両方を内包することができる。漱石は考えた。文学の価値はここから生まれる。

『文学論』でこの意識の過程を説明するために、漱石はある人間がロンドンのセント・ポール大聖堂を観察するときの経験を例として描いている。

「例へば人あり、St. Paul'sの如き大伽藍の前に立ち其宏壮なる建築を仰ぎ見て、先づ下部の柱より漸次上部の欄間に目を移し、遂に其最高の半球塔の尖端に至ると假定せんに、始め柱のみ見つむる間は判然知覚し得るもの只だ其柱部にかぎられ、他は単に漠然と視界に入るに過ぎず、而して目を柱より欄間に移す瞬間には柱の知覚薄らぎ初めて、同時に欄間の知覚これより次第に明瞭に進むを見るべし、欄間より半球塔に至る間の現象も亦同じ。読みなれたる詩句を誦し、聞きなれたる音楽を耳にする時亦斯の如

きものあり。即ち或る意識状態の連続内容を取り其一刻を（プツリ）と切断して之を観察する時は其前端に近き心理状態次第に薄らぎ初め、後端に接する部は、これと反対に漸次其明瞭の度を加ふるものなるを知る。こは只だ吾人日常経験上しか感ずるに止まらず既に正確なる科学的実験の保証を経たるものとす」

（第一編・第一章）

これはセント・ポール大聖堂そのものの描写ではなくて、セント・ポール大聖堂を見ている人の意識の流れの描写である。外界と内面が一つの流れに繋がっている回路である。外界にある対象から視覚的な刺激が神経を通して、人の脳で認知され、そしてその脳や神経が反応を起こして、その反応によって観察する人の身体が動き出す。内面と外界が一つの刺激と情報の流れで持続的に接続されている。

『門』における意識の描写

『門』にもこの『文学論』のセント・ポール大聖堂の場面と同じように、意識の流れの細かい描写が頻繁に現れる。ある人物が外の世界を観察するとき、その人の意識の中に外界の刺激が神経を通して流れてきて、その人物の意識に（F+f）の波が形成される。そしてその意識の流れが進むことによって、焦点Fのイメージが下がってゆき、同時に意識の周辺からfが浮き上がり、新しいFになる。人物が観察している外界とそれを意識する内面が一つの流れになっていることがよくこの小説に表現されている。

例えば、第二章に主人公の宗助がある日曜日の午後、刺激を受けるために東京の街を歩いている場面がそうである。『漱石全集』で六頁も続くこの場面に物語りの展開に関わる出来事は何も起こらない。ここでは漱石の関心はただこの人物が東京の街を歩いているときの意識の流れの上がり下がり過程を描くということにある。そして、この場面にも「影」が現れる。宗助はしばらく歩いたり電車に乗ったりした揚句、空を見てそこに「暗い影」（二の三）を見る。それで家へ帰ることを決心し、この散歩とこの意識の流れの描写が終わる。

また第五章で宗助が歯医者に行く場面に同じような意識の流れの細かい描写がある。応接間で待つ

いる間、宗助は『成功』という雑誌を拾い、その中の漢詩の言葉が無限のループのように彼の頭の中で繰り返される。それから歯医者が診断をはじめ、宗助の歯から「糸程な筋を引き出して」(五の三)、宗助に彼の神経そのものを見せる。宗助の精神状態は小説のなかで「神経衰弱」と呼ばれているが、この場面はその病の生理的な原因が彼の目の前に突きつけられ、さらに彼の意識を促す刺激になる。

これらの場面で意識は持続的に動く流れとして描かれている。流れなくなれば、意識も不健康な状態に陥る。漱石にとってこの流れる状態は意識だけではなく、文学にも不可欠である。例えば、『文学論』で漱石は集会的な文学の趣味ということについて説明している。

「(集会的 F の：引用者)特色の存在は明らかになると共に、特色の推移も亦事実として争ふべからず。推移の源因は個人意識の一部分と、個人意識の全部と、集合意識とを通じて頗る簡明なり。主観的の俗語を用ゐて、之を断ずれば遂に倦厭の二字なる平凡の解釈を得るに過ぎず。Marshall は *Pain, Pleasure, and Aesthetics* 中に快感と苦感との区別は時間に関係あるを詳論せり。時間に関係ありとは、この両感の必ずしも性に於て異なるにあらずして、一を抱持して一定の時間を経過すれば自から他に変化するとの謂なり。此点より見たる快感と苦感とは始めより異なる客観性を具せず、只之を感受する吾人の組織によりて、ある快感を延長して、適宜の期を超ゆる事あれば、先の所謂快感は次第に苦感に陥るに過ぎず。」(第五編・第三章)

ある一つの F が長く意識の焦点の位置を占めると、だんだん苦しくなると論じており、意識の流れがうまく流れなくなると、退屈やストレスが生じるというわけである。

『門』でも同じような状態に出会う。社交や日常生活は上手くいく時はよく流れるが、その流れが止まるとストレスや不安が生じる。例えば第十四章で、まだ御米に出会っていない若い時の宗助のことが回想シーンで描かれている。とても賑やかな社交的な少年だったようで、ここでは彼の意識が元気に流れていたことがはっきり描かれている。

「其時分の宗助の眼は、常に新しい世界にばかり注がれていた。だから自然が一通四季の色を見せてしまったあとでは、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉を迎える必要がなくなった。強く烈しい命に生きたと云う証券を飽迄握りたかった彼には、活きた現在と、是から生れようとする未来が、当面の問題であつたけれども、消えかかる過去は、夢同様に価の乏しい幻影に過ぎなかった。」(十四の三)

ちなみに、この文章にも「幻影」という言葉にまた「影」が出ている。

その後、宗助は御米に出会い、彼らの友人の安井を裏切って彼女を奪い、結婚する。この罪のため宗助と御米は世の中に捨てられる結果になる。集会的な社交の流れから追出されると、二人の意識の流れも変質する。彼らの意識が滞ってしまい、「変化のない」「刺激に乏しい」「鈍い」状態に陥る。

「自然の勢として、彼等の生活は単調に流れない訳に行かなかった。彼等は複雑な社会の煩を避け得たと共に、其社会の活動から出る様々の経験に直接触れる機会を、自分と塞いで仕舞って、都会に住みながら、都会に住む文明人の特権を棄てた様な結果に到着した。彼等も自分達の日常に変化のない事は折々自覚した。御互が御互に飽きるの、物足りなくなるのという心は微塵も起らなかったけれども、御互の頭に受け入れる生活の内容には、刺戟に乏しい或物が潜んでいる様な鈍い訴があった。(中略) 外に向って生長する余地を見出し得なかった二人は、内に向って深く延び始めたのである。」(十四の一)

結局、宗助の問題は意識の流れが泥沼化したことである。御米と結婚してから、社交関係にも自分の意識にも f から F への自然の流れが塞がれてきたのである。過去からの影、友人を裏切って御米と結婚したことが意識の焦点 F に固まってしまって、その位置から次に出てくるはず f に譲らなくなってしまった。そのため、退屈やストレスを感じるようになり、快感が苦しみに変質する。

小説の中で、宗助は借りている家の貸主酒井と付き合い始める。崖の上の家に住む彼と出会ってから、宗助の意識は一時的にまた流れ出し、一時過去

を忘れることができる。新しい刺激が入ってきて、彼の過去の罪はFの位置から流れ去り始めたのだ。

しかし、皮肉にもこの酒井との関係を通してまた過去の影がよみがえってくる。宗助は彼が裏切った友人の安井は実は酒井の弟の友人だと酒井から聞かされる。ここでまたアジア大陸と帝国主義の「影」が小説に入ってくる。安井と酒井の弟は今アジア大陸を冒険しているからである。そしてこの二人は酒井の家を訪れることになっている。つまり、宗助と御米の一番恐れている人間がまもなくとなりの崖の上の家に現れることになるのだ。彼らにとって、抑圧された過去の罪が現在に繰り返し現れる。そのため、宗助の意識の流れがまた滞る。過去の罪が彼の意識の焦点の位置に定着し、その位置から流れ去らなくなる。

御米という「影」

第十四章の回想シーンで、それまでに示唆されていた宗助と御米の過去がはいよいよ説明される。このフラッシュバックの場面で、宗助が御米の元の恋人の安井を裏切った事件が語れている。宗助は当時京都の大学生で、ある日友人の安井を訪れると、初めて安井と同居している女の姿をチラリと目にする。この場面の描写には、御米は文字通りに「影」になり、そしてこの場面全体に影と光の関係が取り立てて全面に描かれている。

「残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘を用いていた事を今に記憶していた。彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。
(中略) この影の様に静かな女が御米であった。」(十四の六)

その後ある日宗助と御米が直接会って、初めて会話する。

「宗助は極めて短かい其時の談話を、一々思い浮べるたびに、其一々が、殆んど無着色と云っていい程に、平淡であった事を認めた。そうして、斯く透明な声が、二人の未来を、何うしてああ真赤に、塗り付けたかを不思議に思った。今では赤い色が目を経て昔の鮮かさを失ってい

た。互を焚き焦がした焰は、自然と変色して黒くなっていった。二人の生活は斯様にして暗い中に沈んでいた。(中略) 宗助は二人で門の前に佇んでいる時、彼らの影が折れ曲って、半分許土塀に映ったのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘で遮ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾むきかけた初秋の日が、じりじり二人を照り付けたのを記憶していた。御米は傘を差した儘、それ程涼しくもない柳の下に寄った。宗助は白い筋を縁に取った紫の傘の色と、まだ褪め切らない柳の葉の色を、一步遠退いて眺め合わせた事を記憶していた。

今考えると凡てが明らかであった。(中略) けれども彼の頭には其日の印象が長く残っていた。」(十四の八)

物語りではこの時点から時間の流れが止まり、そして意識の流れも留まる。これまで、現在の刺激だけに関心を示していた宗助の意識が凍結してしまう。原因は御米という「影」である。ここでも「影」は二つの意味を持っている。意識の焦点として現れる光に輝く影と、焦点の周辺部にできる暗い影とを意味する。光と光がないこと、つまり「明暗」を意味する。

ここで御米という影は同時に両方のFとfになっている。同じ影がFとfの両方の位置を同時に占めると、意識の流れが混乱に落ちいってうまく動かなくなる。小説の物語では個人の意識の流れと集合的な社会の意識の流れがこの時点から凍結してしまう。

『門』に「影」という言葉が人物の意識や認識を描く場面によく使われている理由はここにあると思う。「影」は意識の焦点的印象も、その印象に付着する曖昧な情緒も同時に意味できる。「影」は同時にFとfになれる。「影」は現在の焦点も過去の感情も指摘する。「影」が現れるとFとfの区別が曖昧になり、そのため意識が滑らかに流れなくなる。「影」が意識を占領すると、時間の流れ、そして社交の流れ、意識の流れが混乱してしまい、将来が来なくなる。

「影」と所有制度

最後に簡単にこの「影」という問題と所有制度との関係に触れておきたい。漱石の他の小説と同じように、『門』は財産や所有物に関する出来事によって物語りが展開する。主人公の宗助は近代の所有制度から追い出される存在として描かれている。例えば、崖の上に住む坂井が土地の持ち主であるのに対して、崖の下に住む宗助はただの借家人である。

宗助が所有物の持ち主になれない立場は実は心理学と関係する。当時の新心理学は自己意識の根本的な構造を説明するとき、よく経済的な概念、とくに財産や持ち主との比喻を利用した。自我は自分の主体的な経験を所有する存在として想定されていた。これは政治学者のC・B・マクファーソンがいう「所有的個人主義」そのものである⁽¹⁶⁾。

ジェームズの『心理学原理』(1890年)は特にこの傾向を示している⁽¹⁷⁾。そして、この傾向は意識の流れの観念と実は深い関係がある。意識が絶え間なく流動するなら、その連続性はどうか維持されるかという問題が出てくる。もし意識が常に変わるなら、現在の「私」は過去の「私」と同じ「私」であることはどう保証できるか。この問題を解決するため、ジェームズはさらに比喻を導入し、二種類の「私」が存在し、その一つはもう一つを所有すると言っている。つまり、自我の連続性はある所有制度によって維持されているということだ。ジェームズの言葉をかりるなら、「我々の常識は、自我の統一はただ事後に確認された類似性や連続性ではないと主張する。本当の持ち主である純粹精神的なものに所有されることに関わっている」。過去の所有される自我と区別するため、現在の過去の自我を所有する自我を「考え」(the Thought)と呼んで、ジェームズはこう論じる⁽¹⁸⁾。

「例えば、過去に存在した過去の自我の持ち主とは実質的にあるいは超越的に違うこの現在の考えが、その所有権を受け継いで、その法律上の代表者になるに過ぎないと考えたらどうだろうか。その場合、前の持ち主の死と自分の誕生が同時に行われ、生まれて始めて自己を意識すると同時にもうすでに過去の自我が自分の持ち物になっていることを発見し、過去の自我は野放しになることなく、その所有権は消えるこ

となく連続的に所有される状態になるはずだ。」

このように、ジェームズによると、意識の流れは所有権の引継ぎの過程である。「考え」(the Thought)が現れる瞬間に、過去の自我の経験という所有物を引き継いで、そして次の瞬間さらに新しい「考え」が現れる瞬間に、前の「考え」とその所有物はすべてその新しい「考え」の所有物になる。これを漱石の(F+f)式に当てはめると、意識の焦点のFは意識の持ち主になり、そして前の瞬間のFが意識の焦点から下がった瞬間に、持ち主から持ち物へ変身する。

でも意識の流れが上手く流れない場合、例えば『門』で描かれている宗助の場合、どうなるであろうか。ジェームズの心理学によると、その場合所有制度が崩れることになる。どれが持ち主で、どれが持ち物か区別できなくなってしまう。ある意味で、『門』の物語は自分の自我も所有できない主人公を描いているといえるだろう。

実際に、物語の中で宗助は自我の所有権だけではなく、一般的な所有権も失っている。語り手によると、宗助は「相当に資産のある」(十四の二)家族の長男だ。しかし、亡くなった父親から譲られるはずだった財産の行方は、彼にとってとても謎である。宗助が知らない間に、父親から譲られるはずの財産のほとんどが叔父の手によって消えてしまう。結局、この物語の世界では自分の意識の流れが上手く流れなくなると、自分の自我の持ち主としての身分を失うだけではなく、あらゆる資産も所有できなくなることであろう。

明治民法の下では、ある家の財産は全部その家の家督の手に握られている。しかし、御米との罪によって家督の位置を捨てた宗助が何を持てるだろうか。友人の安井から自分の妻御米を奪っても、自分の妻が自分のものであるかどうか確認できない状態に落ちいる。そして、御米が繰り返し流産や死産をしてしまうことが強調するように、彼は自分の引継ぎ者になる子供も持っていない。石原千秋が論じているように、宗助は「遺産管理能力の欠如と次代への継承を欠いているという二点で、二重の長男失格だと言えよう⁽¹⁹⁾。』『門』で漱石は近代所有制度のなかで主体になれない主人公を描いている。これは家の財産のレベルだけではなく、「影」につきまとわれている主人公の意識のレベルでも語られてい

る。

『門』の結末で宗助が座禅をして救いを求めるが、それも失敗に終わる。あくまでも彼に対して門は開かない。しかし、それなのに宗助が恐れている危機は結局来なかった。安井と酒井の弟は東京を訪れても、特にそれで宗助と御米の過去の罪が問われることにはならなかった。

小説が閉じるころでは、また宗助と御米の単調な日常生活が流れはじまりつつある。

「御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

『本当に難有いわね。漸くの事春になって』と云って、晴れ晴れしい眉を張った。宗助は縁に出て長く伸びた爪を剪りながら、

『うん、然し又じき冬になるよ』と答えて、下を向いたまま鋏を動かしていた。」(二三)

ここで御米には、時間の流れがまた動き出したように見える。しかし宗助にはそれはまだ流れ始めてはいない。やはりこの文章にも「影」が出る。御米の目を刺激するこの「日影」は「うららか」で、光に満たされている意識の焦点Fになっている。しかし、宗助の意識にはそれはまだ暗い冬、言い換えれば光のないところのfに当たるであろう。「影」の呪いから脱出できないままこの小説は終わる。

注

- (1) 石原千秋(1999)『漱石の記号学』講談社、71-92頁。
- (2) 前田愛「山の手の奥」、『都市空間のなかの文学』(1982) 筑摩書房。
- (3) 漱石のテキストの引用は『漱石全集』(1995-1999) 岩波書店によるもので、引用文の振り仮名を省いた。旧仮名遣いは現代仮名遣いに直した。
- (4) Sōseki Natsume, *Mon*, trans. Francis Mathy (Tokyo: Tuttle, 1972), 34.
- (5) 以前にもこれらの問題を触れている拙論があり、内容は本論文と重なるところがある。「英語圏における『文学論』—理論・化学・所有」『国文学』(2006年3月号)、及び「寄与としてのステッキ・夏目漱石『彼岸過迄』の社会学」『日本芸論叢』15(2002)を参照。
- (6) 小創脩三(1989)『夏目漱石・ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』有精堂、及び宮本盛太郎・関静雄(2000)『夏目漱石・思想の比較と未知の探究』ミネルヴァ書房を参照。
- (7) Thomas LaMarre, “Expanded Empiricism: Natsume Sōseki with William James,” *Japan Forum* 20:1 (2008), 47-77 及び Kurt Danziger, *Constructing the Subject: Historical Origins of Psychological Research* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990)を参照。
- (8) Cyril Burt, “Frances Galton and his Contributions to Psychology,” *The British Journal of Statistical Psychology* 15:1 (May 1962), 1-49. ボーダッシュ訳。
- (9) Wilhelm Wundt, *Principles of Physiological Psychology*, trans. Edward Bradford Titchener (London: Swan Sonnenschein, 1904), 2. ボーダッシュ訳。Kurt Danziger, *Constructing the Subject* 同上を参照。
- (10) William Lyons, *The Disappearance of Introspection* (Cambridge: MIT Press, 1986)を参照。
- (11) Wilhelm Wundt, *Principles of Physiological Psychology* 同上1頁。
- (12) LaMarre, “Expanded Empiricism,” 注7参照。
- (13) 漱石における「意識」概念の構造については、増満圭子(2004)『夏目漱石論・漱石文学における「意識」』和泉書院に詳しい。
- (14) 篠田浩一郎(1982)『小説はいかに書かれたか・「破戒」から「死霊」まで』岩波書店、35-36頁。
- (15) 小森陽一(1995)『漱石を読みなおす』筑摩書房、107頁。
- (16) C・B・マクファーソン藤野涉ほか訳(1980)『所有的個人主義の政治理論』合同出版。
- (17) Walter Benn Michaels, *The Gold Standard and the Logic of Naturalism* (Berkeley: University of California Press, 1987)を参照。
- (18) William James, *Principles of Psychology*, Vol.1 (London: Macmillan, 1901), 337-339. ボーダッシュ訳、以下同様。
- (19) 石原千秋『漱石の記号学』77頁、注1を参照。